「大黒天」

（キリスト教文化センターに展示してある「隠れキリシタン遺品収集」より）

Q. 問題です。この遺物のどこかに“十字架”が隠されています。さてどこにあるしょうか？

（答えは、この小冊子のどこかにかいてあります）

いぶき

キリスト教文化センター長　力石（ちからいし）辰也

キリスト教文化センターは開学以来、聖マリアンナ医科大学の建学の精神を伝える象徴的な存在として活動を続けてきましたが、平成21年4月から正式に大学の規程に記載された組織となり、教育棟の2階に移転しました。医学部の学生さんたちがいつでも気軽に入れるような便利な場所にあります。

本学はキリスト教的な人類愛を大切にする医科大学であり、卒業生や病院に勤務する皆さんは知らず知らずのうちにその影響を受けています。在校生、卒業生の医師の皆さんは、入学式の時に聞いた「善きサマリア人のたとえ話」を思い出してください。思い出せない人、初めて聞く人は新約聖書のルカ福音書10章25節から37節までを読んでみてください。インターネットで調べてもすぐにわかります。絵画が好きな方はレンブラントやゴッホ、ドラクロアなどが「善きサマリア人」をテーマにした絵を描いていますから、こちらから入るのもよいかもしれません。「キリスト教的人類愛を大切にする」とはずいぶん大上段に振りかぶった言葉に聞こえますが、毎日の生活の中で困っている人に進んで手を差し伸べる、あるいはそのためのちょっとした勇気を持つということなのだと思います。我々は医療関係者ですから、「困っている人に手を差し伸べる」のはその仕事の本質です。できて当たり前という考えもあるかもしれませんが、個々の場面でそうではないこともあるでしょうし、毎日１００％実践していると自信を持って断言できる職員もほとんどいないでしょう。それでも、マリアンナに所属する職員は、本学の卒業生であるかどうかを問わず、知らず知らずのうちに「困っている人に手を差し伸べる」ことができているように思います。それこそが開学以来、先輩たちが培ってきた伝統の力であり、創立者の目指していたところなのだと思います。

皆さんもよくご存じのように、本学はキリスト教的な精神を大切にする大学ではありますが、一般人のための医科大学であり、学生・職員あるいは患者に布教することを目指しているわけではありません。キリスト教文化センターはそのような立場で、さりげなく学内に存在し、キリスト教の精神を伝える窓口になっています。学生さんは講義の合間にお茶を飲みに来るのでも構いませんし、職員の皆さんは教育棟に来たついでに何があるのか覗いてくだされば良いのです。センターには美しい教会の写真集や、キリスト教に関連する書物などが常備されており、貸し出しにも対応しています。時にはそこで神父様やシスターたちがお茶を飲みながらの雑談に招いてくれるかもしれません。キリスト教文化センターは、肩に力が入らない形でいつも皆さんのそばにありたいと思っています。

日本カトリック医師会主催
第25回日本カトリック医療関連
学生セミナー開催される

7月24日（金）から26日（日）までの3日間にわたり本学教育棟および聖堂において、日本カトリック医師会主催によるセミナーが開催された。今回は『医療における傾聴の実践を学ぶ』というテーマで、聖マリアンナ医科大学からも医療関係者や本学の諸先生、聖職者が参加、その他一般参加者と学生をあわせ約70名が「患者のこころの声　を聴く」大切さを学んだ。

初日にはカトリック教会横浜教区の梅村昌弘司教から歓迎の挨拶があり、「傾聴」は、一人ひとりを大切にするカトリック医療の根本姿勢であり、耳と心を傾け相手の立場に共感し寄り添って聴くことこそ真の人間回復の癒しにつながると話された。続いて、明石勝也理事長より『聖マリアンナ医科大学の医学教育方針』についての基調講演があり、本学の教育理念について、建学の精神である「生命の尊厳」に基づく良医の育成が本学の最大の特徴であると述べられた。

歓迎の挨拶をして下さった
梅村司教

テーマの「傾聴」については、2日間にわたって7つのそれぞれの講演者の立場から具体的に学ぶことができた。

1日目、盛克志神父（レデンプトール会）は、傾聴それは、The Art of Loving。「耳と心を傾けて、能動的に、積極的に相手の話を熱心に聴くこと」であると語られた。それは心をこめて聴くだけではなく、相手の示した言葉や表情からメッセージを受け取り、それをまた繰り返し言語化することで明確にし相手に気づきを与えることによって「その人（話し手）がその人らしく生きる」ための手助けをすること。つまり、聴き手である私も主体的に反応する「援助的コミュニケーション・スキル」のひとつでもある。そのようなカウンセリングマインドを持って「傾聴」の基本を知っておくことは、医療の分野のみならず人間としての豊かさにあずかれるのではなかろうかと問われた。また、今年3月に開設したブレスト&イメージング先端医療センター附属クリニック看護師長 長谷川雅子先生からは、実際の現場における傾聴の具体的事例の話があった。一方、医療現場で言葉にならない声を聴く役割として病院ボランティアをされている椎野悳子さん（ボランティア会ランパス会長）は自らの体験をこう語る。

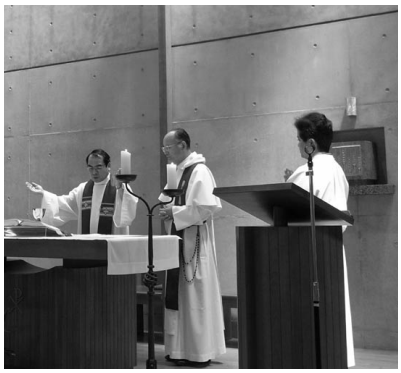
「病状が重く、言葉を発することができない人もいます。その時は、病床で患者さんの足を洗い（足浴）、マッサージをする中で患者さんの心の痛みを『手と目で理解しよう』と努めます。これも　傾聴　です。」

2日目は、本学腎泌尿器外科教授 力石辰也先生より、今年の7月臓器移植法の改正案が可決成立されたことにともなう現実的な問いが投げかけられ、実際に臓器移植を受けられた当事者の気持を「傾聴」する講演もあった。同じく本学臨床検査医学教授 信岡祐彦先生は、診察全体の三分の二は医療面接における情報収集が基になっており、良い医師であるためには、まず第一にコミュニケーションが上手でなければならないと指摘。そのコミュニケーション技法のひとつに「傾聴」があると語られ、医師自身が患者にとっての

薬　と呼べるほど、医師との人間関係が患者の治癒に影響することを強調した。また、同大血液・腫瘍内科准教授の高橋正知先生からは、「耳と目と心で掴む血液患者の思い」についてご自身の臨床経験から次のように指摘する。医師に求められることは「医療技術と人格に加えて、さらに浅く広くいろいろな話題を持ち、患者さんの心を開く訓練です」。最後に、子を亡くした親の会「ちいさな風の会」世話人の若林一美先生（山梨英和大学人間文化学部教授）は、たとえ言葉で表現しても楽にならない「真の苦悩」が遺族にはあると、会の方の体験を話して下さった。ここ数年、自死によってわが子との別れを体験した人たちが増えていることから、そうした苦しむ姿を傍らで見守り、温かく寄り添う存在が、最後には親たちの支えになっていると説明。そして、癒しのためには、語ること、聴くこと、黙すること、そしてもう一つ「祈ること」をつけ加えたいと述べセミナーを終えられた。全体のまとめのシンポジウムでは、7名の講演者それぞれに参加者から積極的な質問が飛び交い、「傾聴」のテーマを基に個々の視点の交流となった。また、今回初の試みとして、グループ毎に別れてのロー

ルプレイ（医療面接での患者役、医師役を演じることで気づきを促す学習法）を取り入れた体験型ワークショップが実施され、そのオリエンテーリングを本学薬理学准教授　熊井俊夫先生と腎泌尿器外科教授　力石辰也先生が指導された。参加者からは、医療面接での患者役／医師役を演じることで、「初めて患者の気持が分かった」などの感想なども聞かれた。

また、セミナー後の一日目は、教育棟1階食堂マリオンにてウェルカム・パーティが開かれ、2日目は、学内レストラン飛鳥にて懇親会、その後、さらに特別教育施設である聖堂の集会室に場所を移し、ホアン・マシア神父（イエズス会）を囲んで夜が更けるのも忘れ親交を深めることができた。最終日、参加者による総合討論及び感想を持ち寄った後、本学宗教学教授である福田誠二神父と、聖マルチン病院 病院長の井原彰一神父（ドミニコ会）による共同司式ミサがあげられた。むすびに、日本カトリック医師会会長 石島武一先生から閉会の辞が述べられ、聖堂にて3日間のセミナーは感謝とともに無事終了した。次回のセミナーは、香川・聖マルチン病院で開催予定とのこと。誰でも参加でき、特に学生の場合は、日本カトリック医師会が参加費と宿泊費を負担している。本学からも活発な参加が期待されるところである。



セミナーに参加して

実際に病院で「傾聴」に携わっておられるシスター方にセミナー参加の感想をお聞きしました。

坂出聖マルチン病院
聖ドミニコ宣教修道女会
シスター山内　留美

「傾聴」のテーマは、福祉領域出身の私にとってはなじみのあるテーマでした。社会福祉援助技術では傾聴スキルは最初に学ぶものであり、測定や観察だけではうかがい知れないクライエントの世界を理解するために、ソーシャルワークの支援プロセスでは傾聴が始終必要とされているからです。今回このセミナーに参加し、初めて医療職の方々と一緒に傾聴について考える機会を得られました。福祉職とは少し異なる反応やスタンスに興味を感じながらも、学ぶべき支援者としての共通する姿勢や、カトリック医療の目指す方向を確認することができました。特に、傾聴ロールプレイのワークショップでは、知らず知らずのうちに病院側の論理で考えてしまう自分を発見し、私にとってこれはひとつのスーパービジョンのようでした。現在、地方のカトリック病院で総務担当として働いていますが、患者さまとの接し方について原点に戻れるような機会となったこの経験を生かし、一人ひとりを大切にしたカトリック医療を実践する病院づくりを目指したいと思います。

マリアの宣教者
フランシスコ修道会
内科医　本学卒業生
シスター岡野　真弓

医師として患者さんやそのご家族に接する時、相手の方の話されたいことを聞く＝「傾聴」より、むしろこちらの伝えたいことをいかに解っていただくか、に心を砕いているような気がします。そして話してもなかなか理解していただけない、ことが日常の悩みです。

しかし私自身が患者さん方の伝えたいことを「自分の枠を外して聞き」（長谷川雅子先生）、そして大変辛い状態にある方の「お話を聞くことに無力で、ただ手を合わせ、頭を下げることしか出来ない私」（若林一美教授）であれる時、患者さんとの関係が変わるように思います。

「聞くことに無力で、ただ主の前に手を合わせ頭をたれている私」に繋がるように思えます。

「耳と目と心で聴く：傾聴の大切さ」

聖テレジア会　本部事務局
臨床パストラル・
カウンセラー主任
四方（よも）　利栄

もし・・・全ての医療従事者が「傾聴」を学び臨床の場で実践したら・・・患者は自分の存在を受け止めてもらえているという安心感から心の不安も和らぎ、信頼関

係も生まれ、治療にも前向きな気持ちになり、治癒力もアップする（シュバイツァー博士の言う「患者の中に住む医師に働くチャンスを与える」ことになる）のではないでしょうか？創立者ステファノ明石嘉聞博士が深く尊敬されていたシュバイツァー博士の哲学、「生命への畏敬」を具現化し実践する一つの方法として「傾聴」があるようにも感じています。今後、全ての医療従事者にはコミュニケーションの基本として「傾聴」を体得して欲しい、と願っている私がいます。

「カトリック医療関連学生セミナー」のお手伝いに関わって

聖マリアンナ医科大学病院
医療安全管理室
石戸谷　登

昨年11月下旬、吉田・前学長から「来年（平成21年）7月に、日本カトリック医師会主催による日本カトリック医療関連学生セミナー　を本学で開催するが、開催に際して福田神父さまの相談に乗って欲しい」とのお話しがありました。正直なところ、それまでこのセミナーが毎年開催地を変え、しかも今年で25回目を迎えるという永い歴史を持つセミナー、ということすら知りませんでした。当初は　単なる相談相手と、軽い気持ちでいたところ、その後は同医師会の石島会長さんらとの打ち合わせや、演者、座長をお願いする先生方への依頼文の作成、ウェルカムパーティー、懇親会会場の手配等々、事務的内容をはじめ様々な業務に関わる羽目となりました。しかし、引き受けたからには途中で投げ出す訳にもいかず、このセミナーを成功に導くため、陰ながらお手伝いすることを約束しました。

今回、お手伝いをして感じたことは、「学生セミナー」と銘打っていながら、実際には学生の参加者がごく僅かで、一般（社会人）の参加者が主であったことです。僭越ですが、将来も「学生セミナー」と謳うのであるならば、如何に学生をメインに参加させるか、が今後の大きな課題となりそうです。それでも、会期の3日間は大きなトラブルもなく、盛会のうちに無事、閉幕を迎えることができました。

この度のセミナーの開催にあたり、横浜教区・梅村司教さまをはじめ、石島会長さん、同医師会横浜支部・酒井支部長さん、同医師会事務局の方々には、大変お世話になりました。また、ご講演いただいた諸先生方、座長をお務めくださいました皆様方には一方ならぬご理解とご協力を賜り厚くお礼申しあげます。そして、このセミナーが来年以降も盛会に開催されますことを祈念してやみません。

キリスト教文化センター活動状況（平成20年度）

平成20年

4月14日
新入生オリエンテーション

5月13日
新入生歓迎会
特別教育施設（聖堂）において、明石先生、吉田先生からの講話があり、その後ＭＣＣ（聖マリアンナ医科大学コーラスクラブ）の歌、フランシスコの祈りの後、会食。70名ほど集まる。

5月19日～7月31日
病院小聖堂　村田佳代子画伯「世界の聖堂と教会と共にある生命」展示

8月1日～9月30日
病院小聖堂　村田佳代子画伯「平和旬間によせて」展示

11月12日～
病院小聖堂　ゼノ神父写真展「ゼノ、しぬひまない」3回にわけて展示。

11月15日
チャリティーバザー
シスター方によるバザー開催。

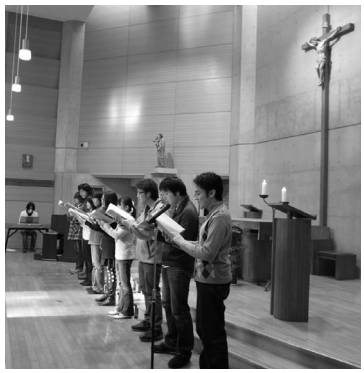
11月27日～1月7日
病院小聖堂　森田貴博画伯「聖フランチェスコと彼の街」展示

12月5日、18日
教育棟1階ロビーにて『クリスマス・コンサート』を開催
聖マリアンナ医科大学管弦楽団＆キリスト教文化センター有志メンバーによるコラボレーション演奏。お昼休みの間に多くの学生、教職員が「アヴェマリア」、「きよしこの夜」などの楽曲に聴き入った。

12月19日
クリスマスの集い
特別教育施設（聖堂）にてＭＣＣの協力のもとクリスマス会を開催。明石先生のお話からはじまり、吉田先生、福田神父からもメッセージを頂き、ＭＣＣの合唱の後、聖堂パティオにて会食。80名近くの学生が集まった。

12月24日
クリスマスイヴのミサ

12月25日
クリスマスご降誕ミサ



平成21年

3月8日
チャリティーコンサート

3月20日～4月16日
病院小聖堂
春をよぶ児童画展「“春”“イースター”ってどう思う？」（監修：村田佳代子画伯）

学生たちの声

「キリスト教文化センターってどんなところ?」

よくキリ文にやってくる学生たちにきいてみました！

■医学部２年　松田　昌之

私にとってキリ文とは、癒しの空間です。

勉強に疲れた時に、この部屋でピアノを弾いたり、友達と談笑すると心が癒されます。

また、とても静かな所なので、試験の前は勉強をするスペースとして使用させてもらったりもしています。

最後に、この部屋を管理している中村さんが、快く部屋を使用させてくれ、時に一緒に笑ってくれる。その事も、居心地の良さの１つだと思っています。

ピアノを弾く学生

■医学部２年　長谷川　博司

キリスト教文化センターには、聖マリアンナの聖母マリア様のような人がいる。マリさんというその女性は、私たち学生に勉強・交流の場を与えてくれ、暖かい微笑みを持って見守ってくれる。

学生の本分である勉強を、キリスト教文化センターで行うことができ、キリスト教の文化にふれることで、医学の知識だけではなく、人間的にも成長していることを実感できます。将来は、キリスト教的人類愛の精神を受けついだ良医になりたいと思います。

感謝と敬愛の気持ちをもって今日もこの部屋で勉強に勤しみます。

■医学部２年　頃彦（うたさと）　尚

『ここ使えんじゃね?』これが僕達とキリ文との出会いでした。試験期間中、人で溢れる図書館や教室に居場所を見失った僕達を、キリ文はいつしか僕らの隠れ家的な勉強スペースとなり『神の部屋』という名前が付きました。勉強に飽きたら息抜きにみんなでピアノを弾いたり、くだらない話で盛り上がったり出来るのもキリ文ならではでしょう。また中村さんという優しいお姉さんがキリ文をより居心地のよい環境にしてくださいます。いつも感謝してますよ。最後に…アーメン！

キリスト教文化センターで勉強している（？）学生たち

教育棟１階ロビー　“クリスマスコンサート”

編集後記

早いもので教育棟にキリスト教文化センターが移転してから2年目に入ります。この一年間を振り返ると多くの学生・教職員の方との出会いがあり、センターが新たな交流の場になっているのを嬉しく思います。

さて今回は、巻頭言にセンター長の力石先生よりあらためてキリスト教文化センターの紹介を頂きました。また特集として、7月に本学で開催された「日本カトリック医療関連学生セミナー」の内容を報告致しました。今回の傾聴というテーマは、医療関係者のみならず一般生活において私達が、他者とともに豊かに人間関係を育んでいくのにとても学ぶことの多い内容でした。「私の隣人とは誰か」、そのことを社会における実践とともに考えさせられるテーマであったと思います。セミナーの感想を頂いた皆様方にはこころより感謝しています。

ところで、表紙の写真の中に「十字架」は見つかりましたか？キリシタン遺物のほとんどは、ぱっと見には分からないように、しかし十字架がはっきりと刻まれているものが多いのですが、この「大黒天」はちょっと工夫して見ないと分からないようになっています。ヒントは手に持っている槌の向きです。さてもうお分かりですか？十字架、クロス、交わり…江戸時代のキリシタン遺物を見ながら人生の出会いの不思議さを感じます。実物がご覧になりたい方は、ぜひキリスト教文化センターへお越し下さい。お待ちしております。（M．N．）

※答え「槌をわざと横向きにして十字架に見せている」

発行　聖マリアンナ医科大学
キリスト教文化センター
〒216－8511
川崎市宮前区菅生2－16－1
〇四四（九七七）八一一一
編集　力石辰也
印刷　城南印刷センター